

教育事例

「介護過程」授業展開に関する一考察 —利用者理解を深める関連図の活用について—

伊藤希久美 (信州短期大学)

About the class method of the care process —The making of the association map to deepen the understanding of the senior citizen—

Kikumi Ito (Shinshu Junior College)

Abstract: You must understand it to perform the care that fitted a senior citizen what kind of person the person is. Therefore I perform the class that I used an association map for as a method I get together, and to understand a senior citizen deeply. I stood on the opinion of the student who aimed at the care worker and performed swing return marks to make the class that ed this used an association map for a better class.

Keywords: Care worker, Association map, The understanding of the senior citizen, Care process

I. はじめに

介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しにより、平成21年4月施行の改正カリキュラムにおいて、「介護過程」：150時間が定められ、A校においても平成20年度入学生より、1年次後期：60時間＋2年次前期：60時間＋2年次後期：30時間の講義・演習を行っている。石野氏は「これは、利用者の“心身の状況に応じる”ためには、アセスメントという判断業務が不可欠であるため、介護福祉士による介護過程の展開が必須要件になったからであると考え。」¹⁾と述べている。

介護過程におけるアセスメントとは「情報収集とニーズおよび解決すべき課題の把握の段階」を示すが、介護を提供する者とは全く違う時代背景、生活環境、人的・物的環境の中で生活をされてきた方の「心身の状況に応じた介護」を提供するためには、その方の「心身の状況」を的確に把握（情報収集）し、判断する（ニーズおよび解決すべき課題の把握）ことが求められるが、これは容易な作業ではない。自分の事でさえ十分に理解できているか分からない状態で、対象となる方と同じ時代を生きることも、同じ経験をすることも、同じ感性のもと物事を見ることも出来ない状況において、いかに広い視野と観察力、専門的知識、経験をもってアセスメント出来

るかが、対象のより深い「心身の状況」の把握につながると考える。

また、「介護福祉士が専門職として社会的な責任を果たすためには、介護過程を展開して、介護の根拠を明確にして介護の結果に責任をもたなければならない²⁾と述べられているよう、「なぜこの援助が必要であるのか」「なぜこの方法で援助するのか」「対象者にはどのような背景があるのか」「現在に至った理由・原因は」などの根拠をしっかりと把握した上で、「今後どのようなことが起きる可能性があるのか」「どのようなことに注意して関わる必要があるのか」などの予測性をもったアセスメントをする力が介護福祉士には求められる。

これらの事から、介護過程の授業においていかに「アセスメント」能力を身に付けるかは大きな課題であると考え、授業展開を行っている。その中で、対象理解を深めることを目的とした関連図の作成を授業に盛り込んでいる。

今回の研究においては、この関連図の作成について学生はどのように捉え・感想を持っているのかをアンケート調査により聴取し、今後の授業展開を模索する上での示唆を得たいと考え取り組んだ。

II. 研究の意義

「関連図」の作成は、看護の分野において用いられ「病態関連図」「対象理解」「生活関連図」といった言葉で一般的に使われている。介護の分野においては、カリキュラム改正の趣旨として「教育内容についての国の基準は、基本となる教育内容を示したものであり、養成施設の教育方針や特徴に応じて弾力的運営が図れるよう配慮したものである」3) と述べられていることから、「関連図」の作成自体義務付けられたものではなく、養成校ごとの方針・特徴にあわせ、それぞれ独自の方法で授業展開がされている。カリキュラム改定から間もないこともあり先行研究の数は少ないものの「関連図」「生活関連図」を取り入れ授業を行っているという報告はある。しかし、学生の意見も踏まえた関連図による利用者理解の有効性を示唆したものは見当たらなかった。

III. 研究方法

介護過程の授業において、関連図を記入した学生を対象にアンケートを実施。

1) 研究対象：A 校（介護福祉士養成 2 年課程）
2 年生 23 名

2) アンケート内容：

質問 1. 利用者理解を深める方法として関連図を作成することは有効であると思うか

質問 2. 関連図の作成方法について理解することが出来たか

質問 3. 今後も利用者理解を深める方法として関連図を作成したいと思うか

質問 4. 関連図を作成してみたの感想・意見

3) アンケート記入方法：

質問 1～3 は 4 段階評価をしたうえで、その理由について自由に記述、質問 4 は感想や意見を自由に記述するよう説明した。

4) 倫理的配慮

本アンケートの趣旨を説明した上で、用紙は無記名且つ、同意が得られた学生のみ提出・回収をさせて頂く事を説明した。

IV. アンケート結果

表 1・表 2 より、関連図を書くことが利用者理解に

【有効である】と解答した学生は、関連図の書き方・今後の活用についても【理解できた・まあまあ理解できた】【思う・まあまあ思う】と解答している。【まあまあ有効】と解答した学生については、関連図の書き方・今後の活用について【まあまあ理解できた・あまり理解できなかった】【まあまあ思う・あまり思わない】と解答している。利用者理解に有効であると解答した学生につ

表 1) 「質問 1・2」の 4 段階評価結果

利用者理解に	書き方	理解できた	まあまあ理解できた	あまり理解できなかった	理解できなかった
	有効である	9	4	5	0
まあまあ有効である	11	0	8	3	0
あまり有効ではない	3	0	2	1	0
有効ではない	0	0	0	0	0

表 2) 「質問 1・3」の 4 段階評価結果

利用者理解に	今後の活用	思う	まあまあ思う	あまり思わない	思わない
	有効である	9	5	4	0
まあまあ有効である	11	0	7	4	0
あまり有効ではない	3	0	1	2	0
有効ではない	0	0	0	0	0

表 3) 「質問 1」についての意見

【有効である】
・予測性がある ・根拠がある ・自分の役に立つ ・援助の方向性が見出せる ・利用者理解に繋がった
【まあまあ有効である】
・情報整理ができる ・情報を再確認することができる ・情報を深めるのには必要 ・利用者を知るうえで有効 ・時間を経た後も情報を正確に確認することができる
【あまり有効ではない】
・利用者理解できるわけではない ・あまり必要はない ・関連図を書かなくても情報収集により利用者理解できる

表 4) 「質問 2」についての意見

【理解できた】
・書くのが楽しかった ・何度も書いているうちに書き方を体で覚えることができた
【まあまあ理解できた】
・書き方が分からない部分もあった ・情報を関連付けていくのが難しかった ・潜在的、顕在的状态の区別がいまいち ・因果関係まで正しく記すことが難しかった ・実際にやってみて少しわかった
【あまり理解できなかった】
・難しい ・背景を考えるのが難しかった

表5)「質問3」についての意見

<p>【思う】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・利用者について知っている、より知る必要がある事について整理できる ・情報を整理し、今後について理解を深めることができる ・課題や今後の方向性が見えてきやすい ・根拠を持って取り組む方法として取り入れていきたい ・利用者への疑問、気付きに繋がると思ったから
<p>【まあまあ思う】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その人に合った適切な介護計画にするためには必要 ・書き出しだけでもマニュアルがあれば作成しやすい ・書く項目が大量になるので作成できないと思う
<p>【あまり思わない】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・難しいし意味がない・実際に職場で使うとは限らないから ・情報整理に役立つので場合によっては使用したい ・関連図作成後見た目が複雑で分かりにくい ・関連図を書かなくても申し送り等で話し合う機会があると思うので必要があると思わない

表6)「質問4」についての意見

<p>【感想・意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後どのような問題が起きるのかなど、自分で教科書を開いて調べたので知識は深めることができた ・学ぶことが多く感性を磨くことにもつながった ・発想がないとできない ・難しかった ・テレビを見ながらちょっとした時間に作れたので楽しかった ・何回も行ううちにだんだん慣れることができたので、今後も継続していきたい ・文献を探したり前の資料を確認したり、知識を深める点、利用者を理解する点でも勉強になった ・情報からいろいろな状況を考え学ぶことができた ・作成に慣れていきたい

いては、書き方に対する理解度も高く今後の活用も可能であると解答している。スピアマンの順位相関係数を用いて統計処理した結果、関連図の作成による利用者理解の有効性と書き方への理解度・今後の活用性いずれにおいても $p < 0.05$ であった。意見としては、以下表3～6の通りである。

V. 考 察

今回のアンケート結果により、関連図の作成が利用者理解に有効であると考えられる学生については、関連図の書き方においても理解しており、今後の活用も可能であることが示された。また、関連図の記入方法の理解が、それをういた利用者理解の方法としての有効性にも繋がっていることが示唆された。このことから、現在は、顕在的状态・潜在的状态・今後の方向性・課題について、決

められた記号で囲み、矢印で繋いで行くという形で完成を目指しているが、更に分りやすく、記入しやすい方法で教授できるよう工夫が必要であることを改めて感じた。

また、関連図自体正解があるものではないため、関連図から学生の利用者理解力を正確に判断することは出来ないが、その完成図は学生により様々である。事例から得る情報量や、現在の状態に至った専門的知識を含めた利用者理解度、今後についての予測範囲など全く異なる。顕在的状态に何故至ったのか、今後どの様なことが潜在するかについては、利用者理解に関する基本的な疾患や身体の構造理解、心理社会的特徴の把握等、専門的知識の充実や広い視野をもって利用者全体を把握する力が必要になる。これに関しては、介護過程の時間だけで補えるものではないが、介護福祉士として必要となる全ての教科における学びを統合させ、利用者理解に活かせるよう授業展開していかなければならないと考える。

VI. まとめ

石野氏は「介護過程が循環していくことによって、より確かな介護計画が立てられるようになり、より意味のある実施が出来るようになる。実施の効果が確認できるようになれば、利用者の関係が深まり、介護提供者にとってやりがいを感じる段階になる。」⁴⁾と述べている。この「やりがい」を感じるための第一歩が、介護過程における利用者の「心身の状態の把握」であり「アセスメント」である。やりがいを持って介護に当たる介護福祉士の養成を目指し、まずは全員が利用者理解を深めるための関連図の作成方法について理解が深まるよう、教授方法を見直しより良い教授法を構築していく必要があると考える。

[投稿 22 年 12 月 17 日、受理 23 年 1 月 31 日]

【引用・参考文献】

- 1) 石野育子著：最新介護福祉全書第7巻 介護過程 株式会社メヂカルフレンド社 p i 2008年.
- 2) 石野育子著：最新介護福祉全書第7巻 介護過程 株式会社メヂカルフレンド社 p14 2008年.
- 3) 厚生労働省「介護福祉士養成過程における教育内容の見直しについて」
- 4) 石野育子著：最新介護福祉全書第7巻 介護過程 株式会社メヂカルフレンド社 p i 2008年.
- 5) 横尾成美：生活関連図学習によるアセスメントの

評価—生活関連図作成と統合化の理解度—第 17 回日
本介護福祉教育学会 2009 年.

6) 山岸節子他著：プチナースブック自分で描ける病
態関連図 大日本印刷株式会社 2009 年.